８　今、宿題の真っ最中

●オマーン補習授業校とは？

Oman の首都 Muscat には三菱商事・三井物産・丸紅・伊藤忠商事・商船三井など商社の事務所があり、約 140 名の在留邦人がいる。

日本人の小中学生はインターナショナルスクールで英語による教育を受けているが、帰国後を考えると日本語による教育も必要である。補習授業校は民家を借りており、12 名の小中学生が通い、日・月・水・木の夕方、日本語による国語と算数・数学の授業を行っている。土曜日は、午前中である。

指導者は、文科省派遣の私と現地採用の日本人講師の二人で、いわゆる複式・複々式の授業である。子どもたちは、家族以外の日本人と日本語で会話できる唯一の時間を楽しみに登校してくる。

●中東＝危険な所？

Oman への派遣が決まったとき、「大丈夫？」という心配の声がたくさん寄せられた。しかし、派遣を希望した私には行き先を選択する気持ちはないし、その立場にもない。

派遣先について何らかの情報を入手したとしても、それはほんの一部分にしか過ぎない。表面上の情報だけは、わからないことがある。危ないようだから…、住みにくいようだから…などの理由で躊躇するということは、待っている日本人の子どもたちにとって申し訳ないことである。

親の仕事の都合で、海外生活を余儀なくされている子どもたちに最高の教育を提供するのが、私の役目である。それこそ、『宿題』を果たせる場であると思う。

日本というぬるま湯から出たら、どこでも危機意識は必要である。大使館からも、常に高い危機意識を持ち続けるように指導があっている。危機管理上、現在、学校という表札を外し、本校の HP も閉じている。唯一、在オマーン日本国大使館の HP から Oman の概要をうかがい知ることができるので、見ていただきたい。私たち補習授業校関係者も、紹介されている。

http://www.oman.emb-japan.go.jp/japanese/3stay_j.htm
http://www.oman.emb-japan.go.jp/japanese/5-001-017_j.htm
http://www.oman.emb-japan.go.jp/japanese/5-001-019_j.htm

Oman は日本人にはあまり知られていないようだし、私も赴任までその存在を知らなかったし、中東に対してマイナスのイメージを持っていた。しかし、Oman は、中東に位置しながら、とても落ち着いている平穏な国である。ぜひ、ほんとうの姿を知っていただきたい。

●気候

一言で表現すると、「高温乾燥地帯」と言える。

4 月～12 月の様子である。

室内温は、30℃～23℃で推移し、12 月でも半袖で過ごせる。部屋にはすべてエアコンが付いており、冷房なしではとても生活できない。ショッピングセンターなどは、冷房が効きすぎるため、半袖では寒いぐらいである。

外気温は、6 月には 40℃を超え、50℃にも達する。6 月頃の日中、自分の影がとても小さくなってしまう。陽射しは、「暑い」というより「痛い」という感じで、日中には出歩けない。ハエや蚊は、涼しくならないと見かけることはない。

水道から出てくる水(海水から作り出した水らしい)は、水道管が直射日光にさらされて、火傷しそうなほど熱せられている。水ではなく、熱いお湯が出てくるのだ。しかし、冬は涼しくなるので、温水の設備もある。暑い時は水道から熱湯が出るため、温水器のスイッチを入れずに温水の蛇口から水を出すと、ふつうの水が出てくる。

湿度は、砂漠が近いこともあって 30～40%程度になることが多いが、時には 70%近くになることもある。温度はもちろんのことだが、湿度の高低も暑さを感じる大きな要因である。時には、アマゾン（年中、気温 35℃以上、湿度 80%）を髣髴させるような蒸し暑さを感じる。

雨量は、少ないというよりも、皆無と言える。雨が降ったのはたった２日だけである。したがって、街の道路には排水設備が整っていない。このため、一旦雨が降れば、すぐ冠水してしまい、水害が発生してしまう。

水に浸かってしまった車

見渡す限り、自然に生育している草木は全くない。目に入る緑は、すべて人が水やりをしている植物だけだ。山肌は、地層が露出した砂漠ならぬ土漠の世界である。

我が家から見える風景

隣接のサウジアラビアや UAE とは異なる地形である。Muscat へ向かうフライト中に映し出される航空路の映像からは、砂漠が土漠に変わっていく様子が鮮明にわかる。

●言語

アラビア語が中心だが、外国人（インドやパキスタンなど）が 30%もいるため、英語やヒンディー語も多く話されている。しかし、それぞれが話す英語は異なる英語であるので、なかなか通じにくい。イギリスから転居してきた日本人も、英語みたいだけどわからないと言う。

買物、飲料水の注文、家屋の修理、電気・水道関係のトラブル解決など、すべてブロークン英語である。面と向かって話すこともたいへんだが、電話でのやり取りにはもっとエネルギーが要る。伝えたいことがきちんと伝わることが大事である。できるだけシンプルな単語を使うようにしている。話し言葉はすべて肯定文で、イントネーションを変えることにより疑問文としている。話せるとか、話せないと言ってる場合ではない。話さなければならないのだ。

電話で用件を伝えたい時は、事前に文章を準備している。
25 年前、ブラジルではポルトガル語だったので、ふとした拍子には英語より先にポルトガル語が出てきそうになることもある。

●食生活

野菜・果物・肉類等の食料品は、India, Thai, China, S-Africa, Spain, Australia, NZ,USA, Brazil など、産地多彩である。果物は、バナナ、スイカ、メロン、オレンジ、リンゴ、アボガド、ナシ、パイナップル、パパイヤ、マンゴーなど豊富である。マンゴーは多くの種類があり楽しみが広がったのだが、私はアレルギーのため食べられなくなってしまった。ブラジルでは、丸かじりしていたのに…。

卵は、とても不思議だ。日付を見ると、出荷日からなんと 3 ヶ月間有効だと記されている。信じられないことだ。したがって、生で食べることはなく、必ず加熱している。

肉は、牛肉と鶏肉だけである。イスラム教の関係で、豚肉はない。（外国人向けに、限られた場所でほんの少しだけ販売されている。）魚は、すべて天然である。スーパーマーケットでも購入できるが、新鮮さを求めて、毎週、港の魚市場に私が買い出しに行っている。

フィッシュ・スーク（魚市場）

タイ、ヒラメ、カレイ：1kg 3 OMR（約 900 円）
ハムール（ハタ）：1kg 5 OMR（約 1500 円）
太刀魚：1 匹 1 OMR（約 300 円）
エビ（車エビ大）：1kg 6 OMR（約 1800 円）
イワシ：40 匹 1 OMR（約 300 円）
他にマグロ、カツオ、サワラなどの大型魚も多い。

市場では、どの魚にも「Fresh」と言ってくる。取れたての Fresh なのか、解凍したての Fresh なのか、見極めが必要である。だから、目玉や表面の状態だけでなく、えらの色まで確認している。運よく、生きている魚に出会うと刺身で食べることもできる。

高速道路で約 15 分の魚市場に一週間に一度行くため、大量の魚購入になる。冷蔵庫に付随している冷凍庫では狭すぎるため、大型の冷凍庫を購入した。

買ってきたら、鱗を落として三枚におろしたり、海老の殻をむいたりと、作業はすべて私の役目である。日本から持参した出刃包丁が活躍している。ただ、魚を洗う水道水が熱湯に近いときがあるので、洗いながら、調理してしまわないかと、心配になる。

作業の後、冷凍庫に入れ、飛び散った鱗片付けを含めた室内掃除が終わると、私の役目は終わる。後は、妻が調理するだけだ。

ゴミ出し、掃除以外に、夫としての役割があるということは、とてもありがたいことである。

日本食は、日本の水田米のような欧州産こしひかりがあるが、すぐ売切れてしまう。他に種類が限られているが、海苔、だしの素、しょうゆ、うどん、そば、パン粉、天ぷら粉、カレールー（約 900 円）などがある。

納豆は、韓国食材店に入荷したときだけ、手に入る。ただし、冷凍納豆だが。ただ、すぐ、売切れてしまう。だから、時々店主に「Do you have Natto ?」と電話で確認してから、買いに行っている。

酒は、イスラム教の関係で一般には販売されていないし、公の飲酒もできない。限定された店での購入にはリカーパーミットという許可証が必要であり、自宅での飲酒は可能である。私は、50 歳の通風以来、晩酌を断ったので、特に困っていない。

しかし、調味料のみりんもアルコールが含まれているので、手に入らない。そこで、日本酒を探したら、やっと見つかった。一升約 10000 円もする大吟醸（誰が飲むんだろう？）と 720ml の日本酒（約 1800 円）が。うちが購入した酒は、すべて料理用である。

●住環境

都合により、前任者から生活（住居＆家具＆生活用品＆車など）を引き継ぐことができなかった。

したがって、赴任直後はホテルに宿泊しながら、住居を探し、外国人居住者が多い地域に見つけることができた。

部屋は、二人暮らしにはとても広々としている。他の日本人と比べると家は狭い方だが、床はすべて大理石である。

ベッド、ソファ、テーブルなどの家具は、パレスチナ人の夫婦から譲っていただくことができた。

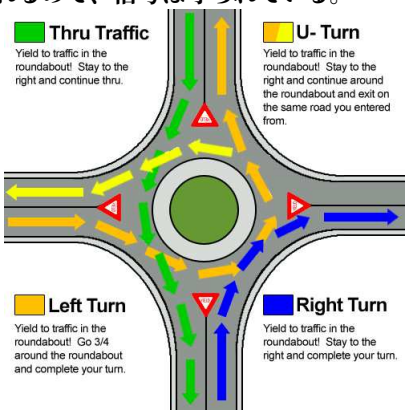
住居、家具を揃えての生活のスタートは、まるで新婚生活を始めたときのようだった。

●交通情報

ブラジルも、左ハンドル右側通行だった。交差点を曲がったら反対車線に入ってしまったことが何回かあったので、今回はしっかり気をつけており、どうやら慣れてきた。

信号のある場所にはカメラが設置されており、違反車はしっかりチェックされるので、信号は守られている。

信号以外に、Round About（環状交差点）という独特の通行方法がある。



道路進行中にロータリーに差し掛かったら、左から車が来ていたら止まり、来ていなかったら進み、前方の状況を確認しながら右折・直進・左折を行う。

また、Round About がない所で逆方向に戻りたい時は、Uのマークがある交差点で U ターンしなければならない。

これまでは日本の運転免許証を元に現地で手続きをすれば運転ができたが、最近になって路上の教習＆路上検定が必須になった。

ガソリンは 1 リットル約 30 円で、ハイオク満タンでも 1000 円程度である。それに比べ、タクシーは 1000 円～3000 円程度かかり、割高である。Muscat は高温のため、車での移動が不可欠である。タクシー以外に公共交通機関はないので、自家用車は必要である。

車はベンツ、BMW、ポルシェ、アウディなど高級外国車が溢れているが、日本車のトヨタ、ニッサン、マツダ、レクサスなどがとても人気で、数多く走っている。